

長期楽観、短期悲観を目指そう

跡見学園女子大学マネジメント学部教授 山澤 成康

世界がいずれ終わってしまうという、長期悲観論は歴史上何度も現れた。まずは平安時代の末法思想だろう。永承7年(1052年)が末法の初年とされ、貴族たちは世の中の乱れを恐れた。平等院鳳凰堂に代表される浄土思想に基づいた建築は、現世より死後の世界に救いを求めたものだ。

明治43年(1910年)7月28日、ハレー彗星が接近する時、地球上の空気がすべて吸い取られて、地球が滅亡するという説が信じられた。その様子は、絵本『空気がなくなる日』などに今も語り継がれている。空気チューブを何本もたすきがけにした少年が表紙である。

第一次オイルショック後も世界の先行きは暗かった。公害が社会問題化するなかで、石油価格が高騰し、トイレットペーパーの買い占め騒動などが起こった。時を同じくして、小松左京『日本沈没』がベストセラーとなった。当時最新の理論だったプレートテクトニクス説に則って、日本が沈んでいくというSFだ。

五島勉『ノストラダムスの大予言』も流行った。「1999年7の月に恐怖の大王が来るだろう」というものだ。子供心にこのフレーズに戦慄した人も多いのではないだろうか。

こうした悲観的予測は、将来の破滅を予め避けるための警告である場合が多い。しかし、長期的な悲観論を真に受けると、毎日の生活は空しく感じる。「どうせ将来だめになるなら、今がんばってもしかたがない」という考えが広がる。やはり、毎日を一生懸命生きるには、将来への明るい展望が欲しい。

現在の日本では、長期楽観説をとりにくい状況がある。最も大きな原因は人口の減少だ。人口減少が暗い影を落とす一方で、2020年には東京オリンピックがあり、短期楽観長期悲観とい

った状態である。

人口の減少はここ数十年間は避けて通れない問題であろう。しかし、長期的に悲観していくべきものだろうか。2014年11月に発表された経済財政諮問会議の「選択する未来委員会」報告書が述べているように、人口が1億人弱で安定する可能性もある。国の政策次第で合計特殊出生率は上昇に転じるという主張は正しい。

長期悲観論は一直線に破滅へ向かっていくようなイメージをもたらすが、現実にはそうならなかったのは過去の歴史が教えるところだ。

その際のキーワードの一つに「レジリエンス」が挙げられる。この言葉の幅は広く、元々は、「ストレス」とともに物理学の用語である。心理学で用いられる時は、心理的回復力となる。深刻な外的ショックがあっても、PTSD(心的外傷後ストレス障害)になる人ばかりとは限らない。PTSDにかからない人は、レジリエンス、回復力を持っているとされる。

2013年に内閣官房にナショナル・レジリエンス懇談会が設置されたが、ここでは防災・減災という意味だ。レジリエンス自体には強靱化という訳語をあてている。本来のレジリエンスとは多少異なる解釈だが、災害関係の学会ではよく使われる言葉だ。

人口問題や長期的課題を考える際にも回復力、復元力という意味でのレジリエンスという言葉が大切な気がする。人口やエネルギーという長期課題であればあるほど、一方向には進まず、復元力、回復力がどこかで働くのではないだろうか。

しかし、無為無策では何も変わらない。短期的には悲観し警戒しつつ、人口減少の障害を取り除いていくことが必要だ。